

# 子どもの変化に 即応した新しさを — 第四版改訂作業から

【三省堂例解小学国語辞典】編集委員 近藤 章

## 今回の辞書



三省堂 例解小学国語辞典 第四版  
三省堂 / 2008年

小学生向けにつくられた最初の本格的な国語辞典のはじまりは、「三省堂小学校国語辞典」(一九五九)であった。かけ出しの小学校教師だったころ、私もこの辞典に、ずいぶん助けられた。

これを受け継いで生まれたのが、現在刊行されている「三省堂例解小学国語辞典」(一九九七初版)である。

この「例解」は、前身が国語辞典の小学生版であるのに比べて、内容が一新され、いわば学習のための辞典となった。たとえば、人名・地名・専門用語などのいわゆる百科項目や、数多くの学習コラムが、新たに取り入れられたりしている。

以来これが版を重ねて、このたび第四版が刊行された。その改訂の一端を記してみたい。

### 一 総ルビと持ちやすい重さに

今回の改訂作業の一つは、これは今回だけの特別な事情であるが、全文総ルビに切り替えることであった。このところの辞書利用の低学年化に、対応するためである。

ルビを付けるには、今よりも行間を広げなければならぬ。これは当然、ページ増となる。が、子どもが使う辞典でもあり、むやみな厚さにはできない。このため、今回はとりわけ、内容のスリム化を視野に入れながらの改訂作業となった。

なお、内容の改訂だけでなく、一冊の重さを減らす努力もした。子ども用の学習辞典である。気軽に持ち運べる、使いやすい重さにしたい。そのため、幾度も紙質を検討し、総ページはそのまま、類書中いちばん手に取りやすい重さにすることができた。

### 二 変化に応じた新たな項目を

改訂の主たる目的は、子どもの言語環境や学習内容の変化に応じた内容の再検討、とくに新項目の採択・補充である。

小学校全教科の教科書、よく読まれている読み物や雑誌などの調査から始まって、子どもたちの言語生活の、想定される変化を視野に、新項目の選定を進めた。

#### ① 情報関係の変化から

情報通信環境が、目まぐるしく変化している。それに伴って、後掲のような語が、子どもたちの語彙になりつつあると考えられた。旧版でも、この面には十分配慮してあったが、それでもこの変化には対応できていない。目配せを怠ると、「デジタル放送」など、数年後にはわざわざ断る必要がなくなつて、削除すべき語になるかも知れないのである。

IT・ID・ウェブサイト(サイト)・スキャナー・デジタル放送・デスクトップ・光ファイバー・ブログ:

②教科書の内容の変化から

教科書の、度々の改訂も見逃せない。

国語科の特に説明文教材や、社会科・理科などの教科書から、新項目候補が浮かび上がり、取捨選択に頭を悩ました。その中で、使用頻度、使用範囲から考えて、次のような語を立項することにした。

エコ(エコロジー)・SGマーク・介助犬・学芸員・化石燃料・縄文杉・食育・租庸調・聴導犬・デイスービス・ハザードマップ・ピオトープ・ペープサート・道の駅：

③言語環境の変化から

テレビ一つを考えても、そのときそのときに、目新しい語が行き交っている。いわゆる時事用語である。これらは、子どもにとつては新語であり、辞書に当たって調べることも想定される。それに応える用意もしておかなければならない。

そこで、次のような語を立項した。  
AD・NPO・個人情報・自給率・少子化・認知症・熱中症・バイオ・ハローワーク・PKO・非核・ブランド・無添加・メタボ・リーズナブル・レトロ：

④子どもの遊びの変化から

子どもたちの遊びや趣味、好きなスポーツの変化にも、配慮が必要である。

例をあげると、旧版を検討して目についた

のが、野球関係の語彙の多いことであった。かつてはそれが実態に即していたであろうが、子どもたちの好みの多様化を考えると、いささか偏していると考えられた。

そんな観点から、追加や訂正をした項目もある。

アウエー・エリア・カーリング・タイムスリップ・時計回り・パワフル・ボード：

⑤再度の見直しの中から

初版の項目選定の際、小学校用としては必要なしとして採らなかつた語が、読み物や教科書にしばしば使われていたりする。テレビ番組などでは、難しい漢語や四字熟語がとりあげられたりしている。

それらを勘案して見直すと、追加すべき語がいくつか出てきた。次は、その例である。

一期一会・落ち込む・禍根・活性化・喜色満面・興味津々・甲乙つけがたい・荒唐無稽・桃源郷・封印・抱腹絶倒：

限られた紙数である。新項目を追加するばかりでは、紙数をオーバーしてしまう。一方で、項目削除が欠かせない。

もともと適切と判断して採録してある項目である。削るのは易しいことではない。子どもの言語環境の変化を斟酌しながら、思い

切って、削除項目を取り出すこととなった。

削除したのは、次のようなものである。

①子どもの生活から遠いと考えられる語  
愛育・栄進・炎々・恩給・金的・破廉恥・フラン・弁じる・望外・奉職：

②別の言い方に代わつたと考えられる語  
石綿・海水中・学課・銀幕・金剛石・産婆・奏楽・奏鳴曲・天然色・友軍：

③消えつつあると考えられる語  
脚絆・膏葉・謄写版・DPE・デノミネーション・ビニロン・ボジ・麦焦がし：

このほか、前回の改訂以後に、国立公園、省庁名、市町村名、郵政制度等の変更があった。その削除訂正も行った。いわゆる百科項目は変更が間々あり、要注意である。

紙数の制約のなか、やむなく立項を見送つた語や、削除に迷いの残つた語がたくさんある。いまは、今回の取捨選択が適切であったことを祈るのみである。

こんどう あきら 一九三三年、名古屋生まれ。

小中学校・市教委を経て、名古屋芸術大教授で退職。同大名誉教授。第一版から当該国語辞典編集委員。